

行楽シーズンの始まりを告げる

## 円山の花見

桜といえば円山と言われるように、今でもシーズンにはたくさんの人たちが訪れ、にぎわっている円山公園の花見の歴史をたどってみます。

札幌では、五月の連休のころ、一斉に桜や梅の花が咲き出し、お花見のシーズンとなります。この時期は、肌寒い日が多いのですが、皆さん待ち焦がれたように花見に繰り出します。今でこそ平岡公園の梅などもありますが、何ととっても円山公園の花見が有名ですね。

円山公園に桜の木が植えられたのは、札幌の基礎を造った開拓判官の島義勇しまよしたけが札幌を去った後、佐賀の乱を起こし、その罪で処刑されたのを鎮魂するため、元従者の福玉仙吉が明治八年（一八七五年）に札幌神社の参道に百五十本の桜を植えたのが始まりといわれています。しかし、参道の桜は枯れ死するものが多かったため、その後境内に植えられ、植え足しを重ねながら現在に至っています。

花見に近郊のたくさんの人たちが訪れるようになったのは、明治十年代の末ころといわれています。札幌では半年の間、雪のなかに閉じ込められて過ごしているため、桜の花が三分咲きのころから、待ちわびたように花見に訪れました。



昭和42年のポスター（北海道神社史から）



昭和6年の花見風景(札幌市教育委員会文化資料室所蔵)

花見の最盛期のころには、メイン会場や沿道にはたくさんのお店が立ち並んでいました。大正十二年(一九二三年)末に路面電車の路線が円山公園まで延長されてからは、電車が市民の主要な足として親しまれ、花見のころの一週間は、花見特別輸送体制が設定された時期もありました。それでも、家族連れや会社員の団体などといったばいになり、途中からの乗車ができなくなるほどでした。

明治四十四年(一九一一年)五月には、詩人の高村光太郎が円山で花見を楽しみ、「…今月山は花ざかり」と書いた札幌見番観桜会が発行した円山公園の絵はがきを詩人の北原白秋に出しています。

昭和三十七年ころからは、レジャー傾向の変化などで、一時ほど桜の下での酒宴は多くありません。しかし、今でも桜の花を愛する人たちが、ゆつくりと木の下を散歩したり、職場や地域のグループで花見酒を楽しんだりしています。

(平成八年五月号・第三十回)